

シンガポールの大学との PBL 型国際共修 ～地元企業と連携したオンラインによるグローバル教育実践～

清藤隆春¹, 齋藤亨子², 橋本智¹

徳島大学高等教育研究センター¹, シンガポール国立大学語学教育研究センター²

1. はじめに

徳島大学高等教育研究センターでは、2021 年前期より「グローバル・パーソン集中プログラム (Global Person Resource Intensive Program, GRIP)」を開始し、全学的なグローバル人材育成に着手した。本研究では、GRIP のプログラムの1つとして実施した、シンガポール国立大学の学生たちとのオンライン PBL 型の国際共修を取り上げる。

グローバル人材の素養でも特に、「コミュニケーション能力」、「協調性」、「積極性」、「多文化(自文化・多文化)に対する理解」を育むことを目指し、GRIP では、多民族国家であるシンガポールの大学の協力を得て、国際共修(言語や文化背景の異なる学生と一定期間チームを組んで行う協働学習)(末松、2019)を実施している。

本稿では、まず、研究を行う上で用いた理論的枠組み、プロジェクトの概要説明を行っている。その上で、本学の学生たちが回答した振り返りシートについての分析を通じて、プロジェクトの効果検証を試みている。

2. 理論的枠組み

(1) 経験学習モデル

学生たちに「深い学び」を提供する枠組みとして、Kolb (1984) の「経験学習モデル」を用いる。学習とは「経験の変容を通じて知識を創造するプロセス」であり、4つのサイクル、「①具体的に経験する」、「②「経験を客観的に振り返る」、「③「振り返りからの学びを概念化する」、「④「学びを次に活かすように実践する」、を繰り返すことが学びを深めるとされている。このプロジェクトでは、主要な体験の直後に学生たちが振り返りをして、その省察を次につなげる仕組みを設けている。

(2) 異文化接触理論

Alport (1954) は、国際交流で異文化間の相互理解を促すには、4つの条件、①「共通の目標」、②「協力的な関係性」、③「平等な立場」、④「制度的なサポート(ルール)」が保証されていることが重要であるとしている。今回のプロジェクトでは、これらを踏まえて、ルール作りやチーム編成を行うように努めている。

3. プロジェクトの概要

(1) 国際共修プロジェクト内容

徳島大学の GRIP 参加学生(以下、「TU 学生」と、シンガポール国立大学の日本語履修(中級レベル)学生(以下、「NUS 学生」)が、チームを組んでオンライン上で協働をしながら、地元製菓会社の協力のもと、学生たちが徳島に因んだシンガポールで売り出す新商品を考案(更に社会を良くするという観点も盛り込む)し、最終的に製菓会社の社長や聴衆(両大学の任意の教職員や学生たち)へプレゼンテーションを行う。

(2) 参加学生およびチーム編成

使用言語は、日本語もしくは英語(中国語も可)とし、状況に応じて切り替えながらコミュニケーションを行う。TU 学生は 26 名、NUS 学生は 34 名(合計 60 名)で、混合チーム(1チーム6名、各大学2～4名ずつ、計 10 チーム)を組んでいる。

(3) スケジュール (TU 学生)

- 9/24 オリエンテーション(概要説明)
- 10/1 第1回交流会(アイスブレイク等)
- 10/2 製菓工場見学
- 10/8 第2回交流会(社長プレゼン含む)
- 10/15 第3回交流会(中間発表)
- 11/12 第4回交流会(最終発表会)

また、学生たちは Zoom 等を用いたオンライン会議や、掲示板アプリの Padlet や、WhatsApp などの SNS を用いた交流を通じて、プロジェクトを進めるようにデザインされている。なお、第1~5回の交流会の直後に「振り返りシート」を提出されて、学生の省察の機会を設けている。



図1 NUS との第1回交流会の様子

4. 調査対象者および研究方法

書面による研究協力への同意を得られた TU 学生 26 名に対して質問紙調査を行った。質問紙の実施は、中間発表後のタイミング（第3回交流会 10/15）に行い、「自分自身で特に変化を感じた点」について自由に記述する（字数は 50 字以上、上限なし）という自由回答形式を採用した。

分析には、KJ 法を用いた質的分析を行い、手順は川喜田（2018）に従った。具体的には、関連項目を収集した後、同等や類似点を集約してカードに記載して命名した（小ラベル）。その後、意味の近いカードを集めてグループ化を行い、それぞれのグループにラベルをつけた（大ラベル）。最後に、空間配置を行って、各カテゴリー間における相互関係を示し、分析、叙述を行った。

5. 分析結果

調査対象者の回答データから抽出された 37 のカードに対して、KJ 法を用いて質的分析をした結果、以下の表 1 のように、7 つの大ラベルと、25 の小ラベルが生成された。なお、紙面の関係上、図解化については、本抄録においては省略することとする。

表 1 結果図（大ラベルおよび小ラベル一覧）

大ラベル	小ラベル
自身の内面での成長	・グループワークでの積極的な発言
	・グループリーダーへの挑戦
	・プロジェクト成功による大きな自信
交流に対する関心の高まり	・国際共修の楽しさの気づき
	・国際交流の楽しさの再認識
	・学内の国際交流参加への動機付け
	・新商品開発に向けたアイディア
コミュニケーションに関する学び	・相手を尊重しながら意見を言う姿勢
	・外国人学生との会話での緊張の軽減
	・アクティブリスニングを意識する姿勢
	・相手が不安にならないように配慮した姿勢
異文化理解に関する学び	・シンガポール文化理解を深めようとする意識
	・シンガポール文化に対する関心の高まり
	・海外文化理解への意識の高まり
自身の文化理解に関する学び	・日本と海外文化の共通点への関心の芽生え
	・自身の文化への関心の高まり
	・日本や海外の文化や社会問題に対する関心の芽生え
	・外国人へ日本文化を知ってもらいたい欲求の高まり
多言語使用に関する学び	・メールでの日英に言語の同時使用
	・できるだけ易しい日本語をしようとする意識の芽生え
	・日本語が通じない時に英語に切り替える方法の取得
英語使用に関する学び	・英語学習の動機付けの高まり
	・英語をツールとして捉える意識の芽生え
	・英語リスニング力の大切さへの気づき
	・英語スピーキング力の大切さへの気づき

6. 考察および今後の課題

本プロジェクトを通じて、広義でのコミュニケーション能力や多様性の受容、チームで協働する力、問題解決力など、語学面以外も含めた幅広い側面での成長を学生たちが実感していることが確認できた。グローバル人材としての能力・資質を育む機会として、一定の効果があつたのではないかと考えられる。今後は、本プロジェクトの改善点についても調査を行って、より良い国際共修プログラムの運営および実施の参考としたい。

7. 参考文献

- ・Allport, W.G. (1954). The nature of prejudice, Cambridge, MA: Addison-Wesley. (オールポート W.G. 原谷達夫・野村昭共訳 (1961). 『偏見の心理』 培風館)
- ・Kolb, D. A. (1984). Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development. FT Press.
- ・川喜田二郎 (2018) 『発想法 創造性開発のために (改版)』 中公新書
- ・末松和子ほか (2019) 『国際共修: 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』 東信堂